

『流転』は、あらゆるものが絶えず変化しながらも、どこかで永続的な存在感を保ち続けるというパラドックスを象徴する言葉です。

撮影を通して、感じた感覚は僕自身を象徴するものだと、写真が教えてくれたと思う。

想いのうねり

10代後半、人生に生きにくさを感じていた。

狭いアパートの重苦しい空気が嫌で、バイトに行くのが億劫で、学校にも行く気が起きなかった。

将来に不安を抱きながらも、何をすれば良いのか分からず、ただもがくように日々を過ごした。

その隙間を埋めるため、川へ向かい、日々写真を撮った。

薄い光に照らされた川のうねりは、思い描いていたイメージとは異なり、滑らかに脈打つ心臓のように見えた。







ゆらぎ

冬の冷たい空気の中、風呂を沸かすために薪を焚くこの場所は、私にとって神聖な空間だった。

凍える身体が暖まり、薪が燃えるパチパチという音が心を穏やかにしてくれる。

そんなひととき、釜の中が気になり、釜の中にカメラを向けた。

火は決まった形を持たず、優美に滑らかに揺れていた。形に囚われないその姿は、自由でありながらも、儚さと美しさを兼ね備えているように見えた。

この写真を撮る際、使用したレンズは割れ、カメラのボディーは所々溶けていた。その姿を通じて、自分自身の内なる「ゆらぎ」を見つめ直すきっかけになったと思う。







野焼きの詩

実家近くの土手で草刈りをした。

刈った草を一箇所に集め、田舎の風習である野焼きを行った。

盆地の日照時間の短さを感じながら、捲き上げる白い煙にカメラを向けた。

薄暗い光が煙に差し込み、波のように流れて見えた。質量のないはずの煙が、なぜか重みを帯びてこちらに向かってくるような感覚にとらわれた。





